

この句集は、元建設省下水道部長・元日本下水道事業団理事長で、地名・相撲研究家、俳人、エッセイストの、「郷顔」こと中本至さんが月刊下水道に執筆した記事の中で紹介した俳句を集めたものです。

輪廻往く夫婦佳き旅雁渡し

月刊下水道二〇〇〇年二月号「もう一つの下水道物語 その五」

「下水道に殉じた熱血指揮官（林 毅）」より

日本下水道事業団などで活躍した、今は亡き林毅さん・素子さんご夫婦の墓前で、お二人に捧げた一句。「どうか、お二人とも、あの世でもう一度佳き夫婦で、無限に楽しんでください」。

夫婦して同じ歩中の恵方道

月刊下水道二〇〇〇年三月号「もう一つの下水道物語 その六」

「町村協議会創設の操舵手（森喜美男）」より

福岡県芦屋町で、遠賀川の水質浄化と同町の繁栄のために力を尽くした森喜美美さん・シゲ子さんご夫婦の仲の良さを詠んだ。

初さんま焼く老夫婦鼻めがね

白萩をこぼしてくぐる夫婦宿

団栗を手に孫二人笑ひ合ふ

月刊下水道二〇〇〇年十一月号「もう一つの下水道物語 その一三」

「六甲より高い理想を下水道に注いだ好々爺（伊藤剛次）」より

コンクリート製品メーカーとして、常に新しい挑戦を続ける伊藤剛次さんの佳き家族の模様を吟じた。

薩摩弁語尾は短かし地酒酌む

夫婦して旅三昧や小六月

別れきし鹿児島空港冬ぬくし

月刊下水道二〇〇一年一月号「もう一つの下水道物語 その一五」

「鹿児島市の下水道を引張った薩摩隼人（坂ノ上孝雄）」より

鹿児島市の下水道を常に新しい感覚と創造力で築き上げた坂ノ上孝雄さんと久しぶりにお会いしたときの吟句。

忘るなき教へあまたや雪の街

風花に切なき水の友と逢ふ

雪深し夫婦もゆかし語りかな

尊翁の笑顔土産に冬の旅

月刊下水道二〇〇一年二月号「もう一つの下水道物語 その一六」

「北海道の大地に下水道を根付かせた人（梶野正充）」より

北海道にこの人あり、といわれた美瑛町の一代限りの水道局長を務めた梶野正充さんと元気で再会することを約束して、新千歳空港で詠んだ。

風花に温顔凜と語りけり

地震落橋偲ぶ年月冬薔薇

幸せの形二つなり春隣

月刊下水道二〇〇一年三月号「もう一つの下水道物語 その一七」

「新潟市下水道の創成期を築いた人物（永井圭三郎）」より

新潟地震に際して、下水道の復旧・復興に寝食を忘れて尽力した永井圭三郎さんの、幸せな模様を詠んだ。

地震のあと冷たき句帳開きたる

震災の瓦礫に凍て蝶迷ひけり

早梅の宮に倒れし石灯籠

人逝きて悲鳴の如き虎落笛

春節や祈る幸せ地震の街

月刊下水道二〇〇一年四月号「もう一つの下水道物語 その一八」

「神戸の下水道を後世に伝える人物（松浦武司）」より

神戸市東灘下水処理場において、当時、前例のなかった二階式の沈殿池と深層曝気槽の組合せの方式で能力向上を図るなど、神戸市の下水道事業に尽力した松浦武司さんご夫婦の永遠の幸せを祈って紹介された。日記に残る、阪神・淡路大震災時の神戸で詠んだ句。

大夕焼永き功労染まりゐて

地震復旧夫婦の絆夏帽子

機動てふ技の館や夏暖簾

梅緋牡丹や永遠に夫婦を祝ひけり

月刊下水道二〇〇一年七月号「もう一つの下水道物語 その二」

「下水道施工に機動化を推進した先駆者（木村宏一）」より

日本下水道管渠推進技術協会名誉会長であり、推進工事に多くの工夫を取り込んだ発明家、そして機動建設工業の経営者である木村宏一さん・昌子さんご夫婦を讃える句。

神無月出雲へ旅し友の雲

達人の墓碑に直立曼珠沙華

西国のななが悲しきちちろ虫

添水鳴る極楽よりの便りとも

月刊下水道二〇〇一年九月号「もう一つの下水道物語 その二三」

「万人が讃えた下水道の達人（東良一）」より

紫川、洞海湾の水質改善に尽力し、「九州下水道の国土無双的な人物」と讃えた故東良一さんに捧げた。

冬鷗ベニスの海に共生す

遺産なる最後の晚餐秋気澄む（ミラノ）

露柱ウィーンの森の調律師

虫すだくローマ骨董値切りたる

蟻螂やセゴビア水道空の青（スペイン）

ポンペイに糞虫一つ孤独かな

ナポリの夜天使のごとき星流る

月刊下水道二〇〇一年十月号「もう一つの下水道物語 その二四」

『ねぶた』情熱を下水道にぶつけた人物（松橋武智雄）」より

青森市の下水道部長として融雪側溝を整備し、住民から「あづましい」と評された松橋武智雄さんの、外国での日記を読んで作句。

妻指せる方へ方へと鳥渡る

月刊下水道二〇〇二年十一月号「もう一つの下水道物語 その三七」

「関西の水コンサルタント界に『六甲あらし』を吹き込んだリーダー
(木村勝弘)」より

大阪府の下水道課計画係長として、流域下水道が制度化された後の総
合計画策定の中核人物だった木村勝弘さんのお孫さん誕生を祝う句。

紫陽花の彩を問いては母臥せり

月刊下水道二〇〇四年八月号「下水道彩事記 その二」

「一犬、影に吠ゆれば、百犬、声に吠ゆ」より

下水道界も文武両道が望まれる。「ホトトギス」からの句として、田村
元元衆議院議長の句とともに紹介。

水筒に井守棲む水貰いけり

月刊下水道二〇〇四年九月号「下水道彩事記 その二」

『『善なく』と『蝶螺』で一攫千金』より

玄関の水槽で二十年近く生きているイモリ。城の井戸に飼われて水を
汚さず、毒物の混入を身を持って防ぐので「井守」という最高級の称
号が与えられている。

カブト虫餓鬼のメダルを賜ふかな

月刊下水道二〇〇四年十月号「下水道彩事記 その三」

「相手を知り己を知らば百戦危うからず」アテネ五輪も下水道も『月
桂樹』と『荊』の道一」より

アテネ五輪での日本の栄誉と屈辱を熟考し、これからの下水道はミス

を犯したら「荊」の道を歩むことになるとし、普段からの心構えが肝心と主張した。

福寿草若き鉢より床の間に

未知の日々若きが背負う初荷かな

若独楽のはじける如く余力あり

月刊下水道二〇〇五年一月号「下水道彩事記 その六」

「新しき酒は新しき革袋に盛れ 下水道の二〇〇五年は『共存共栄』で」より

新しい思想（内容）を表現するには、新しい形式が必要。若く新鮮な方々の登場の舞台も必要。若い人たちへのエールといえるかも知れない。

啄木鳥や吾子に優しき澄みたる目

月刊下水道二〇〇五年三月号「下水道彩事記 その八」

「まず『キガツク鳥』であること 一 国交省・谷戸下水道部長の『攻める』に賛同」より

キツツキには「キガツク」と「キヅカズ」の二種類があり、組織においては「キガツク」が多いか「キヅカズ」が多いかで発展が決まる。として、キツツキをテーマに作句した。

河骨や街の喧騒鎮まれり

浮かみ出て蝶蠟渋谷を旅枕

月刊下水道二〇〇五年六月号「下水道彩事記 その一一」

「食うか食われるか一下水道関係企業も広い視野が必要だ」より
かつて渋谷の河骨川に生息していたコウボネとイモリを詠んだ。

六キロの南京大橋日傘往く

蟬騒に姑娘の中山陵

虐殺を過去と示唆して喜雨来たる

月刊下水道二〇〇五年十月号「下水道彩事記 その一五」

「新しき酒は新しき革袋に盛れ！一細き管を以て天を窺うな」より
この年四月、中国各地で反日暴動の報道があつたが、八月に上海、無錫、鎮江、南京を訪れた。「どこに反日感情があるのか」という気分の旅行だった。南京を去るときに残した俳句。

草紅葉つまづく老の梅里見し（梅里は黄門様）

鴛鴦や旅の過客を癒したる

水澄みて濁世流せし龍田川（奈良紅葉名所縮景）

月刊下水道二〇〇六年三月号「下水道彩事記 その二〇」

「雪と欲は積もるほど道を忘れる―指導者は『先憂後楽』の精神で―」
より

前年暮秋に、小石川後楽園を舞台に開かれた上下水道人の俳句集団・
四季の会吟行会で詠んだ三句を紹介した。

原爆碑ことば少なき花浄土

月刊下水道二〇〇六年五月号「下水道彩事記 その二二」

「すでに平成十九年度予算獲得の策略を一砂漠のラクダから技術革新
を―」より

全国各地の桜の開花の知らせを受けて、芭蕉の句に並べて紹介。

難波より水からくりや世界初

科学者も虫の知恵に追いつかず

月刊下水道二〇〇六年六月号「下水道彩事記 その二三」

「目には青葉山ほととぎす初鰹―一寸の虫にも五分の知恵―」より
前の句は下水道展への期待。後の句は、「小さな虫にも知恵がある。な
おもて人間には無限の知恵がある」ことを皮肉ったのか。

再生水出目金くわつと生きにけり

住之江にやや萎みたる合歓の花

月刊下水道二〇〇六年九月号「下水道彩事記 その二六」

「下水道に必要な強力な超人」『俳句大会』と『下水道展』の情緒」
より

前の句には、国土交通省がPRに全力を注いでいる「循環のみち」の社会的有益性を俳句などの情緒で、全国民に広くアピールしていきたいという思いが。後の句は、下水道展〇六大阪を見学して。

激震に管のはらわた凍ててをり

雪催し瓦礫に死せり灘処理場

マンホール亡霊のごと寒に浮き

崩れ墓見えし骨壺梅悲し

母探す貼紙破れ虎落笛

息白し「女」とのみの柩あり

地震の予知だれも不信よ寒の木瓜

月刊下水道二〇〇七年六月号「下水道彩事記 その三五」

「先んずれば人を制す」『能登半島地震』と『洞爺湖サミット』に思
う」より

平成七年一月十七日未明に発生した阪神・淡路大震災の直後に詠んだ、
現地での地震被害の恐怖を紹介。本号発刊の年三月、能登半島地震が
発生した。

御形摘む母子の笑みのこぼれ出す

勢いの余り食み出すなずなかご

月刊下水道二〇〇七年七月号「下水道彩事記 その三六」

『無用の用』と『遊び』の大切さ―『絵画』『隠元豆』『野草』を認識
―」より

良い組織とは人工的に造り上げられた美しい薔薇や牡丹などにも必要であるが、御形（母子草）、薺（ペンペン草）、繁縷などの野草も必要なのである。

寄居虫の宿を探すも尻軽く

角の無き栄螺転がる夕焼海

月影のさ迷ふことき大海月

磯蟹のひそみし岩を波襲ふ

傲慢な顔に高値や虎魚

蝦蛄跳ねて裏返しとは露知らず

月刊下水道二〇〇七年八月号「下水道彩事記 その三七」

「下水道のどこに磁力があるか―『謝り』より『武士道』がよい―」
より

この年六月初旬、故郷の広島県生口町（尾道市瀬戸田町）を訪ねて、
母校の中・高校生の一部の科学の生徒と海浜を散策し、「水環境と俳句」

をテーマに小講義を行った。中・高校生らとともに作句した。

水澄むや魑魅魍魎も石に座す

台風に地獄極楽うしろ髪

法師蟬合併村に紛れざる

隅田川子規浮かみ出る糸瓜柵

月刊下水道二〇〇七年九月号「下水道彩事記 その三八」

『ないしょの話しあのねのね』の意味一下水道も先行きの明るさを訴えよ」より

この年開かれた第九回全国「水」の俳句大会の下水道関係者の入選作とともに。

地獄絵に喉からからや原爆忌

骨董に小石だけある敗戦忌

水芭蕉天界に向く尾瀬の景

修羅の火に激つ鶉匠の手練かな

山神の水湧く沼や水芭蕉

なまけ鶉に舟端叩く面白さ

月刊下水道二〇〇七年十月号「下水道彩事記 その三九」

「夏が来れば思い出す一面白うてやがて悲しき鵜舟かな」より

広島県出身の郷顔が「夏が来れば思い出す」のは、やはり昭和二十年八月の原爆投下である。当時、国民学校（小学校）六年生だった。

子を殖やせ絶佳を増やせ嫁が君

嫁が君なめる塩も侮れず

壁かじる跡を忘るる嫁が君

月刊下水道二〇〇八年一月号「下水道彩事記 その四二」

「平成二十年は『嫁が君』の目で注視一下水道界は柔軟な頭脳が必要」より

平成二十年のあらたまの年を迎え、天下国家、下水道などのあるべき姿を俳句にした。一句目は、わが国の少子化傾向に対して、人口が増えてこそ優れて佳いことが生まれる。二句目は、少しずつで目立たないが、いつのまにか大量になる。三句目は、鼠は以前に齧った壁のことは忘れてはいるが、壁につけた跡は消えない。「嫁が君」は鼠の異称。

乱の世に淑気の水を放ちけり

暖冬に洞爺の水は沸きたるか

月刊下水道二〇〇八年二月号「下水道彩事記 その四三」

「下水道施設に『賞味期限切れ』はないかーガラパゴス化からの脱出を図るー」より

平成二十年の世相を漢字一文字で表すと、どうなるか。予想は、政界の騒乱からの「乱」か、地球温暖化の「温」か。

独り居に慣れぬ余生や襦袍着て

湯湯婆に眠りの神の住み給う

月刊下水道二〇〇八年三月号「下水道彩事記 その四四」

「下水道の『地球温暖化防止策』を考えるー行水・湯湯婆・襦袍・駕籠で？ー」より

地球温暖化防止策のささやかな手法としてドテラを着て、ユタンポを使うことを挙げて実践。また、下水道の温暖化防止策で、三つの課題を挙げた。

難波場所八百八橋春を告げ

水究め三所攻めで世界とつたり

月刊下水道二〇〇八年四月号「下水道彩事記 その四五」

「下水道界も多彩な『技』と『国際化』が必至ー『栃ノ心』と『河津英麗奈ちゃん』ー」より

グルジア出身の栃ノ心、下水道関係者のお孫さんの二人の例を挙げ、国際化について論じた。「三所攻め」は、相手の両足を手と足で攻め、頭と胸で押し倒す。「とつたり」は、相手の差してくる手を両手で抱え、体を開いてねじり倒す。

春愁や特使の笑顔伸び縮み（五輪評価で）

世直しやケインズ模索四月尽（不況脱出）

エーゲ海プラトン招きあわび食ふ（哲人と）

山笑ふヴェスピオ噴火富士も似て（恐怖）

亀鳴くやナポリに死すも一人占め（再会）

なんでやねん人の和失せし遍路杖

月刊下水道二〇〇九年六月号「下水道彩事記 その五九」

「東京オリンピックは『水』で決まる―『なんでやねん』の本音に同感―」より

二〇一六年の夏期オリンピック開催地を巡る四都市の招致合戦、米国の不況対策でのケインズ復活、イタリア市場での日本車の多さなどを取り上げた。「なんでやねん」の句は、日本下水道管渠推進技術協会の山岡礼三会長の、隠し味の効いた挨拶からひねった。

混沌も揺れるしかない彼岸花

鶏頭や吾れ海族の地が燃えし

月刊下水道二〇〇九年十一月号「下水道彩事記 その六四」

「日本は『物言えば唇寒し秋の風』か―『門前雀羅を張る』ようでも

問題一」より

二〇〇九年九月二十三日は秋分の日で祭日。この日早朝、日の丸を玄関先に掲揚し、狭庭にしばし佇んで、そして詠んだ。

初空の蒼を仰ぎて闘志満つ

月刊下水道二〇一〇年二月号「下水道彩事記 その六七」

「去年今年貫く棒の如きもの―この一年を『騎虎の勢い』をもって進む―」より

平成二十二年・寅年の新年が明けた。民主党の新政権が四カ月経過したが、前年からの鳩山新政権の「決めないことを決めた」的の施策行動を眺め、また小沢氏の強引な逆走ぶりと合わせて、その難航ぶり、難問の先送り、良識者の非難、今後の難問と「難」が続いている。「闘志」は、それらに対するものか。

男寝て女体筑波の山笑ふ

天空の雲ほっかりと地虫出づ

万葉の難波路偲ぶ恋蛩

月刊下水道二〇一〇年五月号「下水道彩事記 その七〇」

「今春は『山笑ふ』の気分にならない―『パンドラの箱』に魑魅魍魎を封じ込め―」より

一句目と二句目は「今回はのんびり『春』を楽しみたい」気持ちで詠んだ。三句目は、大阪府の豊中市と堺市から蛩と飼育容器を持ってきてもらったことを思い出して。

先駆者の恩を忘れず五月晴れ

活断層容赦なく揺れ守宮出づ

月刊下水道二〇一〇年六月号「下水道彩事記 その七一」

「温故而知新、可以為師俟一演奏会ダメな指揮者に音ずれる（狂顔）

一」より

役所入口で見た「OBの方は、入室をご遠慮してください」の貼紙に憤慨した役所OBの弁を伝えた。活断層は鳩山政権の危うさを指した
ものか。

検察のママシの眼つき冴え返る

月刊下水道二〇一〇年十一月号「下水道彩事記 その七六」

『八卦よい！』と『残った！』の意義「下水道界に『ルビコンを渡る

群像』が必要」一」より

日本下水道事業団公取事件で、工務部次長が事実と異なる調書を取られ屈した。数年後、その人は「取り調べた検事を来世でも恨む」の言葉を残して他界した。

木枯や北方尖閣たじろぎぬ

膜処理を広め夜長の長電話

澄む水を育む修羅の途上国

月刊下水道二〇一〇年十二月号「下水道彩事記 その七七」

『「葉落ちて天下の秋を知る」の意―下水道界の人材もマルチプルに―より

日本と下水道に問う現代句。尖閣諸島を巡り、中国の漁船が日本の海上保安庁の巡視船と衝突する事件があった。海外展開を試みている下水道界は、さまざまな国のウラに潜む綺麗ごとでない事情を知るべきだろう。

年の瀬や第九と癌の透きとおり

地球儀に日本威信の春を待つ

月刊下水道二〇一一年一月号「下水道彩事記 その七八」

「下水道は『鼓腹撃壤』に入ったか？―いま出現して欲しい期待の人たち―より

四年前の胃癌完治後、そして肝臓癌克服の経験から、詠んだもの。二句目は、尖閣諸島、北朝鮮の韓国砲撃、北方領土などに対する日本の外交力・戦略の弱さを憂いて。

養生の友生き延びよどじょう鍋

秋天に野の枝光り溢れ出す

月刊下水道二〇一一年十月号「下水道彩事記 その八七」

『骨抜き泥鰌』か『どじょう鍋』か―下水道畑の土壌は良い雰囲気を！

―「よ

九月二日に就任した野田佳彦首相の「どじようが金魚の真似をしても仕方がない。私は泥まみれになって国民のための政治を行う」など国民受けする弁舌を捉えた。第二句は、「国語教科書に下水汚泥を乳酸菌で肥料にする『未来をひらく微生物』（大島泰郎）が掲載。実施状況と有効性を調べて欲しい」との知らせを受け、確認のため佐賀市に飛んで。

地震復興松一本の爽やかさ（陸前高田にて）

月刊下水道二〇一一年十一月号「下水道彩事記 その八八」

『万理一空』の境地で震災復旧を一新国土交通大臣と日本人新大関に期待一」より

本号では、東日本大震災後、東北三県および茨城・千葉県の被災地を訪れて感じたことのほんの一部を提言した。

被災地へ気は漫ろなり初山河

復興にみちのく凜と淑気満つ

ジョブズ読み夕餉に初の河豚食らふ

風評に四面楚歌なり春を待つ

三宝に水を究めて去年今年

月刊下水道二〇一二年一月号「下水道彩事記 その九〇」

「龍頭は前に出る勇氣を持て一池田元首相、ジョブズ、澤穂希に学べ

「」より

二〇二二年の新年の迎え、新年句として詠んだ。

初水のみちのく清め満たしあふ

月刊下水道二〇二二年二月号「下水道彩事記 その九一」

「指導者の感性を高める必要が――それぞれ今年の願望を整理して実行を――」より

平成二十三年の世相漢字のトップは「絆」。二十四年の願望は、挑戦の「挑」と、安心・安全の「安」を挙げた。

立春や景色もどらぬ水辺行く

立春や鼓動戻りし水辺往く

月刊下水道二〇二二年三月号「下水道彩事記 その九二」

「下水道は今こそ侃侃諤諤の論を――一年間の復旧は春寒料峭か春風駘蕩か――」より

東日本大震災発生から約一年の春、被災現地で復旧・復興の状態を詠んだ。前句は、下水道施設の復旧が遅々として進まない都市の状況（春寒料峭）を詠み、後句は、復旧が順調で街の復興も進み、住民の動きも活発になった状態（春風駘蕩）を詠んだ。